

「くっ...殺せ...!」

ホランドはとある王国の騎士団の団長。かつては国のため勇敢な戦いをし、数々の敵を倒してきた王国の盾と呼ばれた英雄だった。だが今は魔族に捕らわれた。彼は今両手両足を鎖で拘束され地面に座らされている。そして目の前には魔族の男が一人立っている。

魔族の悪魔であるの男はの頭頂は立派な角を生やし、身体に纏うように刻まれた魔法の刻印は禍々しい色に染まり、肌の色も人間とは違い褐色で筋肉質な体格をしている。この男魔族軍の幹部の一人であり、今回侵攻する悪魔の軍勢を指揮した将軍である。

魔族はニヤリと笑いながらゆっくりとその場を離れ、魔法の鎖に縛り付けだホランドが魔族陣地のとあるテントへ連れて行った。

魔王軍の幹部の一人である将軍は捕らえた人間の雄を犯して、凌辱して楽しみ、抵抗する意志が折れるまで楽しむ趣味があった。今まで何人もの屈強な男たちが彼らの魔の手によって墮落し快楽の虜となり堕ちていった。

今回の標的は王国最強と言われた騎士の男。彼の鍛えられた肉体はまるで鋼のように硬く、剣技は達人の域に達しており、並大抵の攻撃では傷一つ付けることができず。さらに特殊な魔法加護を掛けられた重鎧に身を包んでいるため防御能力も高い。まさに鉄壁の守りを持つ最強の盾と言える。そんな彼を捕らえるのは容易ではなかったが、今回は彼の過去を使った戦法と兵法を分析し、事前準備した策と伏兵などがあって簡単に捕まえることができた。まず最初に行われたのは彼を誘惑することから始まった。魔族達は擬態魔法を駆使し、人間の好みそうな女子の顔を作り、ホランドが魔法の鎖で縛り上げられだテントへ訪ねる。

魔族達が用意した偽りの美女を見たホランドは完全に動じない態度だったが、女性に化けた魔族が近付き、柔らかい手を伸ばし頬に触れ、手も足動けないホランドは嫌でも触られ、しかめっ面をする。

「ねえ~そんな怖い顔しないでよ♪お姉ちゃんと遊ばない?」

魔族の女は甘えた声で囁き、ホランドの耳元で息を吹きかける。その吐息が魔力が付き、それによって彼を誘惑し警戒心を揺れると謀る作戦だ。

「ふん！俺は男に興味はない」

しかしホランドは全く動じず、冷たい視線が変装魔法を使った悪魔の正体を見破り、それを聞いた魔族の女の表情が曇る。

「え？私ってバレちゃった？あ~~」

と言いながら女から元の姿に戻る、ガッチリした男性悪魔でした。

「俺の目は誤魔化せないぞ！この腐れ外道！」

「チッ、はいはいお邪魔しました~」

悪魔がテントを出した瞬間、ホランドの足元が紫色の魔法陣を現れ、突然のことに驚きを隠せず、しかし何も起こらなかった。

「ん？なんだこれは？」

「残念、これで貴方はしばらくここから出られないつもりでこの結界魔法を張った。」

この場をいかなかった筈の悪魔の将軍の声が脳内に響く。いつの間にかテント内は紫の霧が周りに漂っている。徐々暑くなってる。

将軍の言う通り、魔法の鎖で縛られてるため動くこともできない。しかも全身の鎧が着せたままの状態なので暑さも耐え難いほどではない。

一体何を企んでるかわからないが、この程度の罠なら余裕に耐えると思ったホランドは甘かった。

ホランドの頭の中はさっきの女性魔族のやらしい姿が思い浮かぶ。あの柔らかな胸と太腿に魅惑された。すぐに邪念を捨てるようにわざとらしく咳払いをして、正気を戻す。

紫の霧が漂うテントの中に囚われホランドはまだ邪念を思い浮かぶ、このままではいけないと思い、必死に理性を保ち、これから起こる出来事に予想した。
(私の邪念を増幅し矜持と信念を揺さぶるのようなやり方使うとは...あまりにもこの私を見縊った)

ホランドはそう思うだが、心の奥底は痒く、何かが萌芽し始めた。

次の日、魔族達はホランドを連れで陣地の近く居た地下祭壇へ入った。そこは広い空間であり、壁や床には無数の彫刻や壁画があり、そこには様々な魔族の文字と生き物の絵が描かれている。ホランドはこの光景を見て、以前似たような魔族の古代遺跡に入ったことを思い出す。そして彼は祭壇の中央にある台座の上に拘束された。

「ここは何の場所だ?何をするつもりだ?」

「ここは我が一族の秘儀を行い神聖たる聖域。」

魔族の将軍が答えた。

「そう、魔族化する儀式の舞台だ!」

将軍が指を鳴らすと、祭壇の後ろの巨大な扉が開き、そこから大勢の悪魔達が位置につけ。一斉に魔族の言語でなんらかの呪文を唱えると、ホランドの頭上から赤い光の粉が現れて降り注ぎ、光を浴びた彼の鎧は加護を失い光の粉になって溶かす。

ホランドは自分の身体の変化に気付いた。体が熱くなり、肌の色はやや黒っぽくなり、鎧がいなくなり体を露呈され、下腹部がいつの間にか呪印が刻まれ、心臓はドクンドクンと脈打ち、血液は沸騰してるような緊張感になる。

(馬鹿な...いつの間に!?まさか昨日のあの霧と魔法陣はこれのため?)

「ふむ、あの驚い顔は、やはり成功したようだな。」

ホランドの身は鎧下に着る黒いタイツしか残ってない。体全体の筋肉が膨らみ、乳首と性器の形はタイツによってくっきり浮き彫りになり。

「お楽しみはまだ始めてないよ騎士団長殿。」

将軍は嗤いながらホランドのヒゲを搔き上げる。

すると彼の耳元に囁き始める。

その声を聞いただけで、ホランドの背中にゾクツとする感覚が走り、股間のモノがゆっくりと勃起する。

(くっ!なんて卑劣なことを!!私は屈しないぞ!)

ホランドの体は呼吸とともに上下に動き、汗が垂れ落ちる。

将軍の囁く声を聞いたたび、全身の血流が加速し、下半身が疼き出す。

「いいねえその顔、実にそそるよ騎士団長様。」

「黙れ!この下衆め!!触るな」

将軍はニヤリと笑いながらホランドの頬に手を触れた。その瞬間、ホランドはビクビク震えた。

「おおお、これは面白い反応だな。どうやらこの手の刺激に弱いみたいね。」

将軍は髭を撫で回しながら、もう片方の手はホランドの胸筋から腹までなぞり上げた。

「うう.....」将軍は両手を使い、優しく愛おしそうに触れている。

まるで恋人同士のように、一方でホランドの顔は真っ赤に染まっていく。このような屈辱が初めて味わった、男にこのように触れるなど今まで一度もなかった。それが今自分がこんな目に遭われ

るとは…… 将軍は徐々に手を下げていき、今度は太腿の内側に手を入れた。次に尻の方へ手が滑り込み、そのまま割れ目に沿って中軽く押した。
「なっ…!?!何をするつもりだ!」

ホランドは怒鳴りつけるつもりだったが、心の中は葛藤が起きている。卑猥な情事は断じて受け入れない彼は必死に抵抗するつもりだが、下腹部の淫紋が効果を及ぼし、抵抗の意思を削ぎ落とされる。

体が勝手に興奮することに対し背徳感が味わうホランドのアナルはすでにヒクつき始め、我慢汁も溢れてきた。

そんなことは予想通りの魔族将軍は手を離れ、ホランドが台座の上に寝転び、両足を広げて仰向けになった。

そして両脚を持ち上げて自分の肩に乗せる体勢を取る。

(こいつらは私を汚す気か？何人を相手にすれば済むのか…?)

「はい、ここはお預かりします、続きは私ではなくで」

将軍は後ろに下がり、周りの悪魔たちがまだ呪文を唱え始めた。

(一体これからどんなことが……?)

その時だった……ズブウ……突然、何か太いものがホランドの中に入ってきた……

(んがっ!?)

それは太く硬い棒のようなものだったが、痛みは全くなくむしろ快感が襲ってきた

(なんだの感覚……気が……おかしいになりそうだ!)

台座周りの床が淡々と光り出し、その光が徐々に強くなっていく

(まさかこれも魔法陣!?)

ホランドの頭の中で、その可能性を考え出したが、もう遅かった。

(まずいっ!このままでは!!)

彼は祭壇の真ん中にある台座に縛られ、まさに捧げもののような格好。

電流のに痺れるような感覚に堪えながら、なんとか抜け出そうとするが無駄に終わった

(くっ!力が入らない!)

やがて体全体が熱くなりだし、全身に汗が流れ落ちていく。

魔族達の目の前には巨大な肉塊が現れた。

表面からは無数の触手が伸び、先端にある口は触手が舌のようにチロチロ動いている。

さらに胴体の中心から一本の管が現れ、先端には小さな穴がある。ホランドは息を飲み込んだ。

その光景を見た将軍は再び前に出てきた。

ホランドの股間部分は膨らみができ、先走り汁が出ていた。

「騎士団長さんよ、先ずはこれを耐えて見せよう」

浮かんでいる肉塊は紫の光りを放ちだした。

その瞬間、先端の穴から大量の白い液体を噴き出してきた。

ドピュッ……ピュッピュルルルーー!!!

身動きできないホランドはその白濁液を浴びてしまった。

生暖かいどろっとした粘液が体を覆いつくしていく。

同時に強烈な匂いが鼻を刺激した。

あまり嗅いだことのない独特な香りがする……

(こんな大勢の敵の前に...なんとか耐えてみせる!!)

ホランドは歯を食いしばり、この屈辱に耐えようとした時だった。

ジュル..... 突如ホランドの体に異変が起きた。

肌がピリピリし始め、体と心の奥底が疼いてくる。

アナルに入れた魔法の塊が刺激を与え、乳首やペニスも勃起し始めた。

次第に体の感度が上がり、下半身を中心に火照り始める。

そして再びあの快楽が襲いかかってくる。魔法の塊が溶けて液状化し、腸内を満たした。

ビクン.....!

(うぐう!?これは...何故だ!?)

今度は直接前立腺に届き、まるで射精するような快感が押し寄せてきた。しかも一回だけではなく何度も繰り返す。

グチュ.....ヌチャ.....クチュクチュ..... ドロリとした紫色粘っこい液体はホランドの腹の中を満たす。

肉塊はその場で留まり、まるで魔族たちとともにホランドの苦しむ姿を楽しむように見つめている。

やがてホランドの体は変化し始める。

逞しい胸板がさらに盛り上がり、筋肉質な肉体は更に大柄に変わっていく。

「んッ...!やめっ...!!」

ホランドが苦しめながら抵抗している最中でも容赦なく体内で魔法陣による魔力注入が行われていく。

やがて体が全体的に大きくなっていき、手足はさらに太くなっていく。

皮膚の表面にも血管らしき線が浮き上がり、騎士団長としての誇りと高き意志が淫邪な魔法との抗争がまだ勝負できると思っているが、その精神力がますます削られていく。

(まだ諦める気がしません。私はまだ負けていない!)

守り続けだ祖国、忠誠を誓った主、信頼される仲間達と愛する家族が待ってる。そのために彼はどんな苦痛にだって耐え抜く覚悟はある。

「ぐっ.....ああ.....」

今まで何回の死線をくぐり抜けだホランドはもう一度奮起した、手足を縛る魔法の鎖を引きちぎろうと力を入れ始めた。

「私は...ファーランド王国の誇り高き王国騎士団団長、ホランド・ハードウィクだ!魔族なんぞに簡単に屈しない、王国の盾である私はどんな攻勢でも防いで見せるー!!」

雄叫びと共に、ホランドの強く意思が魔法の鎖を少しずつ剥がす、彼が縛られる祭壇の台座から立ち上がることを成し遂げる。

悪魔であろうと、魔獣であろうと私は...」

ドピュッ! その言葉の途中で、ホランドの股間から勢いよく白濁液が出てきた。

(んあっ!?)

手が反射的の動きで股間を隠しても間に合わん、長い間溜まりました大量の精子が溢れ出す。

認めたくない解放感と快感がホランドの矜持を衝撃を与え。突然すぎる事態に遭わせた彼の頭が真っ白になり、その数秒間魔族達の呪文詠唱ははっきりと聞ける、意味が理解できないか。足

下にある魔法陣が更に光り、浮かんでる肉塊がホランドに近づき、彼を丸呑みするように一気に肉塊の中へ飲み込まれた。

「うわああー！」

肉塊の中に吸い込まれ、ホランドの悲鳴が響き渡る。

全身を覆うような触手たちが一斉に動き出し、ホランドの体を弄ぶ。

(やめて……くれ……)

無数の細い触腕が絡みつき、揉み解し、締め付ける。

触手が乳首を摘まんだり、股間の膨らみの竿を掴み、亀頭を撫で回す。口の中にも入り込み、舌や喉の奥まで犯していく。

「うう……うう……うう……うう」

もう声すら出なくなった。

そして遂にホランドの体に異変が起きる ビクン……ビクビク……ドクンドクン……！！

(熱い……！体中が……燃えるようだ……)

体が火照ってきた、熱病のように体温が上昇していき。心臓が激しく鼓動する。

(一体……どうなっている？)

自分の体がおかしくなったと思った時、体の奥底に何かが生まれた。

(敗北…これが私の運命なのか……こんなことで負るとは…)悔しい気持ちと一緒に、体が更に燃え上がるように激しくなる。

まるで自分が自分でなくなるように、体の奥にあるものがどンドン膨れ上がっていく感覚に襲われる。

同時に、肉塊に飲み込まれたホランドの様子を見守る魔族将軍は満悦至極のようだ。

肉塊が触手を伸ばし祭壇の台座をしがみつくまで根を生やしてるように固定され、肉の繭の形となり。中にあるホランドの声がまだ聞こえる。

グチュ……ヌチャ……クチュクチュ……ドロリとした紫色粘っこい液体はホランドの腹の中を満たす、それによつての魔化を避けられない。

魔族は人間を魔族に変える方法を持っている、それは儀式魔法によつて人間の体内に特殊な魔力を注ぎ込むことで、肉体が変異を起こすことだ。

肉繭の中に囚われてるホランドは今まさに魔族に変えられれている最中だ

(私はまだ耐える、まだ勝機があるはずだ…!)

心の中で叫んでも、体は止まらない。

やがて肉塊の中のホランドに変化が起きた。ゴキリッ……メキッ、メリッ…… 骨と筋肉が軋む音を立てながら、骨格が変化していく。

肌の色が深くなり、血管らしき線が浮き上がり。下腹部の淫紋がより濃く染まり、全身に広がる、全身から汗が流れ落ち、息遣いは荒くなり、意識はぼんやりとし始めてきた。

(私は…魔族化すると言うのか…)

抵抗の意志はあるが、既に手遅れだった。

肉塊に飲み込まれた瞬間から、ホランドの魂は既に侵食されていたのだ。

肉塊から溢れた触手たちはホランドの体を弄び続ける。乳首やペニスなどの敏感な部分を責められ、快楽が襲ってくる。

「くっ……この程度で屈するものか…んんグッ…」

それでもなお、彼は必死に耐え続けた。

だが、それこそが間違いだと気付かなかつた。

(ああ……ダメ……これ以上されたら……)

次第に彼の精神が蝕まれていった。

(もっと……触って欲しい……)そして遂にその時が来た。

ドクンツ……ドクンドクン…… 心臓が大きく高鳴り、体の奥底に生まれたものが爆発しそうなほど膨らんできた。そして、とうとう限界が訪れ、抗う術はない彼は徐々に現実を受け入れ始めた。

(もう……我慢できない……もう……)

ホランドはそのまま肉塊に包まれたまま、絶頂を迎えた…

ビクビク……ビュルル！ 大量の白濁液が肉繭から溢れ出し。魔族将軍はそれを見てホランドが墮ちたと確信する。

肉塊は更に動き、ホランドの肉体を変化していく。肉塊が脈打つ度に、中にあるホランドの体に異変が起きていた。

将軍はそれ過程待つように祭壇に留まる。肉繭の中では、体の変化が始まったばかりだ。グチュグチュ……ズブズツ…… 肉繭の中から聞こえる水音が激しさを増していく中、紫色の汁液が溢れると共に、肉繭の中のホランドは更なる変貌を遂げた。

しばらく経つと。肉繭は役目終わったように

ホランドを放り出し、溶け落ちるように魔法陣と一緒に消えた

全身が紫の液体塗れたホランドは肌の色は褐色に変わり、髪も長く伸びて、額には二対の長い角が生え、瞳は赤く染まった。口元からは牙が伸び、爪は鋭く尖っている。

「私は…」

彼は自分の手を眺め、握ったり開いたりする。感覚はちゃんとあるようだ。肉繭の中にいたせいで、全身がベタついている。

「調子はどうだ？騎士団長さんよ」

魔族の将軍は祭壇の向こう側にいる座席を座って声かけました。

ホランドは振り向き将軍を見た瞬間、眉間にしわを寄せ睨みつける。

「一体どういうつもりだ」魔族に捕まった以上殺される覚悟をしていた。

だが、まさか魔族に変えられるとは思わなかった。

ホランドは魔族を憎んでいない、ただ王国の平和を脅かす外敵から守るため戦ってきた。

魔族も人間と同じ感情を持っていると信じているだがここまでにされるとは思わなかった。

体全体に這い回る淫紋、は入れ墨のように刻まれており、肉体が作り変えられているのがわかる。

肉繭の中に囚われた時、既に肉体は変異を始め、魂も侵食されていた。

ホランドは薄々と気づき、体が勝手に魔族の将軍ももとへ歩み寄る。

(ダメ……止まらない……)

足取りを止めようと力を入れるが、逆に力が抜けていき、そのまま歩いてしまう。

将軍の前に立ち止まると、自分と似たような体型持つ将軍を見つめる。

ホランドより背が少し高く、筋肉質な体格を持つ。黒いマントの下に、赤い甲冑を身につける。

兜を脱ぐと、短い金髪が現れる。

鋭い眼光、整った顔つき、顎髭を伸ばし、威厳のある雰囲気醸し出す。

「ファーランドの勇士、ホランドと言ったな。」

頭の中にはぼんやりとした霧がかかり、何も考えることができない。ホランドは魔族将軍の股間の膨らみに惹かれるように近づいていく。

「ほう、ほしいか？」

ホランドの視線が気づかれた、そう聞かれた途端ホランドは躊躇した。

(私はこんな下劣な卑猥な欲望を浮かぶとは...)

そんな葛藤など知らず、将軍は腰のベルトを緩めズボンを下げると、ホランドの目の前に現れたペニスを露にした。

(ああ.....なんて大きい.....)

ホランドはぼんやりのうちに興奮していく。本能のように。

将軍はニヤリと笑いながら、ホランドの頭を撫で回すと勃起しているペニスの先端が脈打ち。

一瞬でぼんやりから意識が戻った彼は咄嗟に離れようとした。

ドクンッ.....ドクンドクン..... 心臓が大きく高鳴り始めた。

(これ以上は.....)

心の中が嫌っても、身体が正直に反応しちゃう。抵抗する意志とは裏腹に、下半身は熱くなり、肉棒は固くなり始めた。

全身に鳥肌が立ち、胸の奥が締め付けられるような感覚に襲われる。

全身から汗が流れ出し、息が荒くなる。

「いや、私は望んでいない...欲望など邪念は...」

必死に否定するが、心の中では欲望を満たそうとしていた。

理性では抑えきれないほど、肉体に刻まれた淫紋の効果が強くなっているのだ。ホランドは自分の意思に反して、将軍の前で膝まずき、両手を使い将軍の魔羅扱始める。

手の中で硬くなっていく感触を感じつつ、自分のモノもぴくぴくと脈打つ。

「体が...手が勝手に...」

将軍は満足げに笑っている。

「いいぞお、乗ってみたらどうだ」

言われるまま、ホランドは立ち上がり、ゆっくりと将軍に跨り、騎乗位の体勢になる。

「おほおおっ！」

熱い亀頭がアナル内に入り込むと同時に、凄まじい快感に襲われ思わず声を上げてしまう。

「んっ！あああっ！！」尻穴の中に入った瞬間、あまりの気持ちよさに絶頂に達してしまいそうになる。

ズブブッ！！ヌプウウウッ！！！！ 太くて長い巨根が腸壁を押し広げていく度に強烈な快樂が生まれてくる。「おっ！？あああー！！！！」

脳天まで突き抜ける衝撃的な刺激に耐えられず、獣のような喘ぎ声を出してしまった。そして一気に奥深くへと挿入された時、限界を迎えた。

ビュルルルルー！！！！ビュッビュッビュッ！！ 大量の精液を放出し、白濁色の液体が自分の腹に飛び散っていく。

同時に、肛門内の剛直からも熱いザーメンが大量に注ぎ込まれた。

将軍はニヤリと笑いながら、目が穢れているホランドを見つめる。

(また、出してしまった.....)

肉体に刻み付けられた淫紋のせいで、もう我慢できない。

一度の性交だけで終わるわけがない。アナルが反射的に締め付けてしまい、将軍が感じてる表情を見てますます欲情してしまう。

将軍がまだ腰を振り始めた。

最初はゆっくりだった動きがだんだん速くなっていき、パンッパンッと激しい音を立ててホランドを犯す。その度に大きな尻が激しく揺れる。

肉棒の根元までずっぼりと飲み込んだ。

肉棒の形がはっきりとわかるくらいに腸内で締め付けられ、前立腺と結腸を同時に責められ、耐えられないほどの快感に襲われる。

ドピュルッドクドクドクッ…… 魔族の濃厚な精液が注がれ、腹が膨らむのが感じられる。

将軍のペニスが抜かれると、ホランドの肛門はぽっかり開き、そこから白いドロっとした精液が溢れ出した。

ホランドの肉体は魔族化によって苦痛が感じられない、逆に快楽を感じるようになってしまった。

将軍の掌がホランドの胸に添えられた途端、乳首から体全体に痺れるような感覚が生まれる。

「うっ！くうっ……」

体だけではなく、意識までしびれるホランドが重心を失い、床に倒れた。将軍はそのまま座っている、倒れてるホランドを見下し。

国王、騎士団の仲間、そして家族の声が聞こえるように、何者が呼び掛けている。

(今の私は…無事に戻れるのか…)

快楽によって堕ちた自分は騎士の誇りがなくなり、体は魔族によって穢され、淫紋付けられだ上に魔化され。王国を守るための戦いを敗れ、それでも生き延びた自分はどんな顔で王都へ戻るか。恥さらしの騎士は国に帰れない、このままここで死ぬべきだろう。

ドクンッ……ドクンドクン…… 心臓が大きく高鳴り始め、全身から汗が流れ出し、息が荒くなる。

(これ以上は……国の、騎士団の恥を晒さない)

将軍に犯されてた時の自分を思い出し、気力が弱まっていく、自決ですらできない。

「殺せ…こんな私は生きる価値が残らない…」

ホランドは力を絞り出しささやき声を出す、しかし将軍は笑っている。

「それじゃ面白くないじゃないか。葛藤せよ!躊躇え!本能と信念どっちを従うか、私欲と責任の前はどう選ぶ。綺麗な嘘と汚れた潔白、どっちが民に示すのか。」

「…戯れ言を…」

将軍は立ち上がってホランドの顎を掴み上げる。

「本気だぞ、ワシは。」

その瞬間、眩しい紫色の光が祭壇全体に照らす、目を瞑るホランドは再び気を戻したらもう祭壇の入口にいた。消された鎧も元通り。

あの夢はなんだったんだろう？ そう思いながら、ホランドは空を見上げた。

魔族の侵攻はまるでなかったことのように、周りあったはずの狼藉が消えた。

しかし、何かおかしい。

(退けた…?魔族は退却したのか、いや。見逃した…か)

釈然しない、そんな気がする。

だが、今すぐ考えることではない。

今はとにかくこの場を離れることが先決だ。

王都と自分の仲間達の安否は確認したいけど、まずは安全な場所へ移動するのが最優先だ。
ホランドは自分の体に違和感を感じた。体の奥底の何かがムズムズしている。(なんだこれは?)
今まで感じたことない感覚に戸惑いつつ、彼は歩き続けた。帰るべき場所へ。

つづく